

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ふくろうハウス			
○保護者評価実施期間	令和7年12月1日		～	令和7年12月26日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	20	(回答者数)	12
○従業者評価実施期間	令和7年12月1日		～	令和7年12月26日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	9	(回答者数)	9
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年1月6日			

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	隣の小学校や特別支援学校から多数の児童が利用	下校時刻の重なりなど考慮した送迎の体制整備や安全に配慮した交通移動。	市内の小・中学校の下校時刻に合わせて都度、送迎配置を組んでタイムリーな対応を心がける
2	臨機応変な対応力	急な利用の相談等に対応出来る様心掛けている	・利用枠などを日常的に確保し電話やラインなどで申込体制を整えます。また日頃から「相談しやすさ」を大切にし保護者様との信頼関係を築いて参ります。
3	行事や地域の祭り参加などの充実	法人内でいろいろな事業を行っているため、地域の祭りでは出店を行ったり全体での行事に取り組んでいる	・今後も積極的な社会参加の場の提供と機会を増やします

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	老舗の施設のため、周辺の環境に配慮が必要 ※施設の出入り口が道路に隣接しており、車両の乗降時、注意が必要	近隣へ配慮しながらの支援になってしまう。駅の近くという立地にあり、施設を利用していない一般の方の往来や車両の通行があり、十分に配慮が必要。児童は活発に動ける年齢でもあり、支援のほどかしさを感じる。	どこまでオープンにするか難しいところではあるものの、今後は地域や近隣の方への配慮を忘れずに、説明会や内覧会など積極的に行い、開かれた事業所を心がける。
2	・資格保持者(児童指導員・保育士・理学療法士・作業療法士)などの確保が難しい ・地域的な問題もあり、福祉人材自体の人員不足が問題となっている	・人員確保の手段については若年層の応募に繋がりがやすいツールを利用する必要があるが、ハローワークや少数のアプリに頼っている	・現時点で無資格や未経験でも研修制度やOJTを強化していき、既存職員のスキルアップを進めます。 ・医療機関や相談支援専門員、訪問看護など外部の専門職と連携し助言をもらいます。
3			

公表

事業所における自己評価総括表

○事業所名	ふくろうハウス誉田		
○保護者評価実施期間	令和7年12月1日		令和7年12月26日
○保護者評価有効回答数	(対象者数)	15	(回答者数) 7
○従業者評価実施期間	令和7年12月1日		令和7年12月26日
○従業者評価有効回答数	(対象者数)	7	(回答者数) 7
○事業者向け自己評価表作成日	令和8年1月6日		

○ 分析結果

	事業所の強み(※)だと思われること ※より強化・充実を図ることが期待されること	工夫していることや意識的に行っている取組等	さらに充実を図るための取組等
1	《県立千葉聾学校から近距離》 県立千葉聾学校からも近いので、通いやすく 勤の負担や安全面でリスクが少ない。下校時間 後、すぐに利用でき活動時間を確保できる	同じ学校や同じ特性を持つ児童がおり、一般的な社会参 加の機会が少ない(難しい場面)がある。	積極的に外出の機会をつくり、いろいろな人々とのか かわりを増やす。法人全体での行事も参加を呼びかけ る。
2	《聴覚障害児に特化した専門性》 ・職員の多くが手話やキョードスピーチを習得(学 習)しており児童1人ひとりに合わせたコミュニケーション で支援をおこなうことができる。「伝わる」 安心感のある環境。	・手話・指文字・筆談・視覚的サポートなどお子さ んに合ったコミュニケーション方法を選択・習得し ている。 ・自己肯定感を高め指導員やお友達同士のやり取り のなかでも社会性を学べる	・「手話が使える」とは、実は曖昧な表現で、日 常的な会話が出来ても手話通訳士や 手話技術検 定を取得していない職員も多数おり、コミュニ ケーション能力の向上や検定取得に向け、法人全 体で勉強会や講習を行っている。
3	《同じ聾学校に通う児童が多い》 ・学校と放課後の環境がつながりやすく友達どうし の関係を継続しやすい。孤立しにくい。沢山の仲間 の中で孤独を感じにくい。	・聴覚障害児向けの学校や職業の選択などの情報を 出来る限り共有している。 ・健聴者との関わりも大事にしている。伝わる喜び と伝わらない場面の想定など将来を見据えた体験の 中で成長できる支援を重要視している。	・将来的な自立に向けた社会スキル訓練の実施と 実践を積極的に行う。

	事業所の弱み(※)だと思われること ※事業所の課題や改善が必要だと思われること	事業所として考えている課題の要因等	改善に向けて必要な取組や工夫が必要な点等
1	《対象者が限定的になりやすい》 聴覚障害児に特化している分、重複障害への対応力 の課題	聴覚障害児に特化した事業所のため、重複障害や多様な 特性への対応に課題がある。	今後は外部研修や関係機関との連携を通じ、職員の支 援スキルの幅を広げ、必要に応じた支援体制の強化を 図る。
2	《支援内容が固定化しやすい》 学校や生活パターンが似ていて多様な価値観に ふれる機会が少なくなりやすい。	限られた時間の中で事業所内や決まった顔ぶれでの 支援が中心となり、地域や健聴者とのかわりが限 定されてしまいがちになる	今後は年齢や個別ニーズに応じた活動の工夫や外出・ 体験活動を取り入れ経験の幅を広げる。また地域資源 の活用や交流の場を検討し、社会性や経験の支援につ なげる。
3	《職員の専門性への依存》 手話やキョードスピーチが中心の環境となっており、 中途失聴で手話が使えない児童への対応や他の 障害を持つ児童への対応がスムーズにいかない	手話・キョードスピーチが使える職員に業務が集中しや すい	今後は職員間での学びやOJTを通していろいろな職 員が対応できる体制づくりを進め、安定した支援 の提供に務める。